一石三鳥の比較民俗研究

賈蕙萱※

比較研究は一つの良い研究方法であり、筆者は比較研究により一石三鳥の効果が得られると考える。なぜそういうのかと疑問に思う人もいるが、例を挙げたらわかるのである。中国には「比べてみなければわからないが、比べてみたらびっくりしてしまう」という諺がある。比較を通して異同を知ることができ、民俗もまたその例外ではない。そこで、筆者は中日の民俗比較を例として説明をしていきたい。

まずなぜ異同が存在するのかを解析していきたい。研究によると、人が異なる環境において、異なる生活要求を持つこととなる。その目的は自らの生活を便利にするためである。理由は簡単で、灼熱の環境には、涼しい風が必要となり、氷のように冷たい環境では、暖を取る必要がある。如何に「涼」と「暖」を得られるかは、その中にまさしく民俗の力がある。扇子で涼しい風を起こすことができ、オンドルで暖を取ることができる。「涼」と「暖」を取る民具をそれぞれ比較してみれば、勿論同と異を見ることができる。

わかりやすいように、まず中日両国共通している文字民俗を解析することにしよう。中日両国では数多くの共通の漢字を用いられている。その共通点を知りたいなら、なぜ共通しているのか、いつ起源したのかを研究する必要がある。具体的にいえば、おおよそ７－８世紀、すなわち日本の奈良時代、中国人が発明した漢字が日本へ伝わり、最初の段階ではもっぱら漢字を使っていた。その後、日本では漢字の偏旁を用いて日本語の仮名が編纂されたが、一部の漢字は依然として使われており、さらに中国語にない漢字が創られたのである。例えば「峠」は中国語の「山頂」という意味で、「辻」は「十字路」、「丼」は「大碗」、「凧」は「風筝」」という意味となる。これらの新たに作られた文字は、漢字の「象形文字」という特徴を継承しており、実際には中国伝統漢字文化を大いに発揚したものである。明治維新後、日本では漢字を用いて作られた新しい語彙も少なくない。例えば、「幹部」、「哲学」、「主義」、「社会」など、後にそれらの語彙は中国へ伝わり、広く使われるようになった。周知のとおり、かつて朝鮮、韓国、ベトナムもみな漢字を使っており、東アジア漢字文化圏を形成した。しかし、今も漢字がなお使われているのは中国と日本のみである。日本では、日中関係が冷ややかになったことを理由にして漢字を切り捨てることはなかった。漢字を大事にし、毎年よく使われ、優れた漢字を選出している。漢字の母国である中国は、日本人が漢字を使用し、豊かにして発展させたことに対して、感謝の意も持つべきである。筆者は漢字がまさしく中日交流のなかの共通言語であり、友好の話題であると考える。漢字は両国のリーダ及び国民の間の感情を近づけさせることができる。この共通点もまた人と国の関係におい

※ 中国・北京大学日本学研究所

ては、一石が的中した一鳥であるといえる。

次に、中日民俗の比較から差異を知る例をみてみよう。箸は食民俗文化の範疇に属しており、中日両国とも箸で食事をする。それを比較研究してみると3つの大きいな差異があることがわかる。1つは中国の箸は日本の箸より長い。2つは中国の箸は縦にして置くが、日本の箸は横にして置く。3つ目は中国の箸の頭部は日本より太い。同じく東アジア文明に属する中日両国は、なぜ箸に3つの差異が存在するのか。それは環境と生活様式によるものである。

中国人は食事をするときによく大きなテーブルを囲んで共食し、箸は少し長いほうが食べ物を取るのに便利である。しかも縦方向の動作が多く、箸も縦にして置くと使いやすい。一方では日本人は食事をするときに、取り分けて各自で食べることが多い。食べ物が目の前にあるから、離れたところから取る必要がない。したがって、箸が少し短めでも差し支えないし、箸に使う材料を節約することもできる。各自で食べることに慣れた日本人は、食事をする時に横方向の動作がより多く、その場合は箸を横にして置くほうが使いやすくて便利である。中国人は炒めもの、しかも油濃いものをよく食べるから、滑らかで、頭部がより太い箸が挟み取るのに便利である。それに対して、日本人はあっさりした魚介類料理がよく食べるから、頭部の細い箸が挟み取るのに便利で、とりわけ貝殻から貝の肉を取りやすい。比較研究により見出されたこの3つの差異は、明らかに人々の知恵の結晶である。しかも箸を使うこと自体は健康増進の効果があり、その理由は、箸と指の摩擦により、脳のいくつかの神経と手の関節の運動を促しているからである。この見聞を広めた差異は、一石が的中した2つ目の鳥であると言わざるをえない。

次に、中日民俗比較研究の相補性について述べさせていただきたい。筆者は中日両国の人びとの行動様式から説明をしていきたい。

行動様式はその国の歴史の蓄積、また体制と切り離せないものである。中国の長い歴史において、王朝の政権交代が頻繁で、その上に「一朝の天子と一朝の臣」のように、王朝が変わるたびに、下のものや法令なども全部入れ替わることもあり、庶民はそれに適応するのに大変であった。複雑な政治環境が中国人に特殊な才知を身につけさせた。人間関係を重視し、自己防衛に長じる。根本的な是と非に関する大きな出来事の際に迅速な対応ができる。しかし、時には親戚や友人の頼みに応じるために、兄弟分などの義理人情を重んじ、仲が良いから、あらゆる手段を使っても頼み事を成し遂げることがある。したがって、行動様式において、臨機応変で融通的な特質が現れる。無論、いくら臨機応変で融通的であっても、法律を無視したら犯罪になる。法律を守ることは人として世に処する基本原則である。

一方では、日本人は長期的に万世一系で、中国より戦乱の少ない平和な環境で暮らしてきた。天皇制はすでに125代が継続しており、長い間変わったことがない。近現代以来、たとえ首相や内閣閣僚が走馬灯のように更迭されたとしても、その官僚体制が比較的に安定しており、少なからずの国家行政管理の経験を蓄積されてきたため、法律や各種の規則と制度が完備し、かつ細やかである。おおよそ150年前の明治維新は、日本の近代化のための思想と理論の基礎を作り、徐々に日本を法治国家へと築き上げ、同時に非常に法制と公徳を重んじてきた。そのため、日本人は

法規を厳守する習慣を身につけた。規律を厳守するのは良いことであるが、杓子定規で、融通が効かないまで達すると、かえって大事を逸することがある。例えば東日本大震災が発生後、警察は融通が利かずに、どうしてもアメリカから派遣された救助犬を検疫しなくてはならなかったため、人命救助の好機を逃したことがある。

言うまでもなく、弾力性があり、融通が利く中国人と、規律を順守し、融通が利かない日本人とは、行動様式における相補性がある。もし互いに学び合い、相手の長所を取り入れ、自らの短所を補うことができるのであれば、疑いなく優位を補完することとなり、双方の事を処理する効率をあげることができる。これはまさしく民俗比較研究の中の、一石が的中した3つ目の鳥であり、筆者はこれを「一石三鳥の効果」と称する。

上述のように、民俗比較研究は大変意義のあることである。異同を知り、知識を広めることが出来るだけでなく、長所を取り入れ短所を補うこともできる。喜んで行わないわけがないではなかろうか。(2015・1・10稿　翻訳：余志清)

学界動向

第15回アジア民俗学会学術大会
『重陽とアジアの孝道文化』

2014年9月20日から22日の3日間、中国で古来有名な孝子24人中の董永の出身地、その名も「孝子感天動地」からとられた湖北省孝感市で、重陽の節句とアジアの孝道文化を主題に国際フォーラムが開催され、中国はもとより日本・韓国・モンゴル・ベトナム・ミャンマー・シンガポール・タイ・ラオス・マレーシア・インド・香港・台湾のアジア各国、フランス・ドイツ・イギリス・スペイン・ロシアの89名の研究者が集った。中国では、重陽の日を老人の日として国民の休日としたこと、高齢化社会における民俗学の対応という現代的課題のもと、国際アジア民俗学会と孝感市政治協商会議の主催で孝感万豪酒店を会場にして行われた。

初日の午前、開幕式をうけ、中国·劉魁立、韓国・金善豊、日本・佐野賢治が基調講演を行い、午後から8つの分科会に分かれ、二日間にわたり発表・コメント・討論が行われた。日本からの研究者の報告は、佐野「親捨て山考―日本の民俗から見た老人観―」、西脇隆夫「重陽節供と登高習俗」、繁原央「重陽節句の民俗比較」、繁原幸子「葬儀の変容」、桜井龍彦「敬老文化と民俗学」、劉京宰「日本の孝文化思想と外来文化」、何彬「隠居民俗と孝道」であった。各国の敬老に関する民俗、陶立璠会長はじめ老大家から大学院の若手まで世代の違う研究者の老人観がさまざまの視角から取り上げられ、パワーポイントなどの使用で理解もしやすく、大変参考になった。久しぶりに会った賈蕙萱先生は、「中日の孝道文化の比較研究」を発表された。

参加者は、同じホテル内に宿泊し、食事も共にするために学術交流の実も上がった。また、主催者側のもてなしも湖北工程学院の学生たちのボランティアをはじめ、最終日のエクスカーション、董永公園・雲梦県博物館・李白記念館・影絵（皮影）館の見学など配慮の行き届いたものだった。日本語通訳の一男子学生は、将来日本に留学し民俗学を学びたいとの希望を語ってくれた。充実した3日間の会期を終え、次大会のモンゴルでの再会を約して帰路についた。

（佐野賢治）